

キュウリの退緑黄化病

1 病原の特徴

- (1) キュウリ退緑黄化病は、ウイルスが原因で起こる病気で、埼玉県内では平成20年に初めて確認されました。
- (2) 病原は、ウリ類退緑黄化ウイルス(Cucurbit chlorotic yellows virus;CCYV)で、クロステロウイルス科クリニウイルス属に分類され、タバコナジラミ類により媒介されます。
- (3) 本ウイルスの自然感染による症状が確認されている栽培作物は、キュウリ、メロン及びスイカです。
なお、ナデシコ科のオランダミナグサ及びクワ科のクワクサにも感染が認められています。
注)タバコナジラミ類とは、タバコナジラミバイオタイプB及びバイオタイプQの両種を指します。

2 被害の様子

発生初期は、葉に退緑斑点が生じ、その後、斑点が拡大し、癒合しながら葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化します。葉縁が下側に巻く症状がみられ、黄化による草勢低下及び収量の低下が認められます。初期症状はミニキイロアザミウマがウイルスを媒介するキュウリ黄化えそ病に似ています。



写真1 退緑黄化病の初期症状

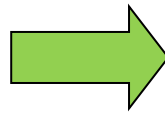


写真2 病状が進行すると葉脈部分を残して全体が黄化する

3 伝染について

- (1) 本病は、タバコナジラミ類によってのみ媒介されます。
- (2) キュウリからキュウリへの伝染が最も重要な伝染経路と考えられており、ほ場、野良生え及び家庭菜園の感染キュウリ株が感染源と考えられます。
- (3) 成虫や幼虫が、感染株を吸汁することで保毒虫となり、数時間から数日間にわたりウイルスを伝搬し続けます。
なお、汁液(接触)伝染、種子伝染及び経卵伝染はしないと考えられています。



<参考写真1> 黄化えそ病の初期症状



写真3 タバコナジラミ類の成虫と幼虫

4 防除時期と防除方法

防除に当たっては、タバコナジラミ類を①施設内へ「入れない」、②施設内で「増やさない」、③施設の外へ「出さない(死滅させる)」の3つの対策が重要です。

(1) 耕種的防除

- ア 本ぼには無病苗を定植する。
- イ 施設栽培では、施設の開口部に、目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、タバコナジラミ類の侵入を防ぐ。また紫外線カットフィルム、光反射資材等も利用する。
- ウ ほ場及び周辺に防草シートを設置し、除草を徹底する。特に、施設周辺のウリ科野菜は伝染源となるので、除去する。
- エ 施設内には栽培作物以外の植物を持ち込まない。
- オ 発生前から黄色粘着テープを設置し、タバコナジラミ類の早期発見と初期防除に努める。
- カ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、ビニール袋等に入れて、完全に枯れるまで密閉処理してから処分する。
- キ 収穫終了後は、抜根又は地際部から切断した後、施設を密閉して蒸し込みを行う。

(2) 薬剤防除

- ア 薬剤の多用は抵抗性のタバコナジラミ類を生じさせるので、その使用は必要最小限とし、耕種的防除を基本とする。
- イ 育苗期から定植時に、登録のある薬剤を施用する。
- ウ タバコナジラミ類の薬剤感受性の低下を防止するため、他害虫への使用を含め、同一系統薬剤の連用を避ける。
- エ 薬剤が葉裏に十分かかるよう散布する。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県